

ふじのくに茶の都ミュージアム店舗の改修計画
—内部空間と外部空間のつながりと小堀遠州の綺麗さびのデザイン提案—

1. はじめに

1-1 研究背景

県からの依頼をうけて本研究室では静岡県島田市に位置し、お茶の文化、産業、学術、観光の拠点であるふじのくに茶の都ミュージアムの整備計画に携わる。

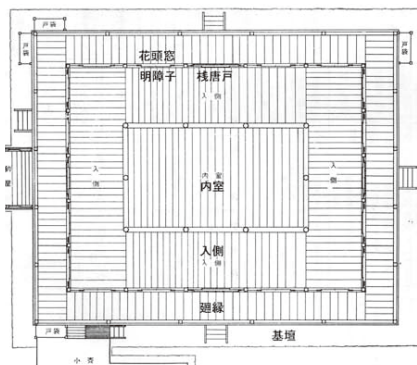
1-2 研究目的

東側商業棟1階の店舗の改修において店舗の内装だけにとどまるのではなく「内部空間」と「外部空間」を関係づけることで都市や周辺環境と建物をつなげ、より社会に溶け込む建築を設計すること、また、小堀遠州にゆかりのある「綺麗さび」、「吹き寄せ」、「間道」をデザインコンセプトとして設計することを目的とする。

2. 調査

2-1 内部空間と外部空間のつながりについて

岡山県備前市に位置する閑谷学校では半内部の廻縁、半屋外の庇・基壇によって「内部」と「外部」をつなげるしくみをつくっている。このように「内部」と「外部」を区切り、個々として考えるのではなく「半屋外空間」、「半屋内空間」となる緩衝地帯を設けることで境界線をあいまいにし「内部」と「外部」をつなげていく。



2-2 小堀遠州の綺麗さびについて

小堀遠州は千利休、古田織部に続いて、茶の湯の世界を確立した茶人。「綺麗さび」と称され主観性の強いわび・さびの茶に「客観性」を与えた点が遠州の「綺麗さび」の一番の特徴である。



(小堀遠州/弧蓬庵)

3. アプローチ

島田市お茶の郷博物館の現状調査では、全体計画においては展示棟への動線が滞ってしまう問題点があった。東側商業棟1階の店舗においてはテラス・軒はあるものの、「内部」と「外部」の関係性が希薄であり、デザインコンセプトとなる小堀遠州のゆかりのある綺麗さびは見受けられなかった。内部空間と外部空間のつながりについての調査や小堀遠州の綺麗さびについての調査からこの改修計画においては次の3つのことを考慮し設計することを目指す。一つ目は店舗を独立したものとして扱うのではなく博物館や中庭、周辺の外構と関連付けながら設計すること、二つ目は「内部」と「外部」の境界線を曖昧にすることで都市や周辺環境と建物をつなげてより社会に溶け込む設計をすること、三つ目はお茶の郷博物館で重要視されている小堀遠州ゆかりのある「綺麗さび」、「吹き寄せ」、「間道」を用いて設計することである。

4. 設計趣旨

4-1 全体計画における店舗の位置づけ

店舗を独立したものとして扱うのではなく博物館や中庭、周辺の外構と関連付けながら設計することで滞っていた展示棟への動線をスムーズにする。

東側の駐車場からの来客が店舗に直進入店することを阻み、来客は商業棟の東側から北面にまわり、中庭を通過して、博物館に入る。展示を観た後に博物館東側入り口から外部を通過して商業棟1階店舗の東側エントランスからまたは商業棟2階のレストランから入店する。施設全体における来客の動線を考慮し、外構や延べ段によって来客の流れを店舗へと導く。

4-2 内部空間と外部空間のつながり

店舗の内装だけにとどまるのではなく内外を関係づけることで都市や周辺環境と建物をつなげ、より社会に受け込む建築を設計する。「内部」と「外部」を区切らずに境界線をあいまいにすることで「内部」と「外部」をつなげていく。

- ①既存の軒下、テラスで緩衝地帯をつくり、「内部」と「外部」をつなげる。
- ②軒下には「内部」から「外部」かけて杉板を貼ることで内部と外部をつなげる。
- ③壁ではなくガラスを配置することで「内部」と「外部」の境界線をあいまいにする。
- ④「外部」から「内部」、「内部」から「外部」へと視線の抜けを確保する。
- ⑤「内部」と「外部」にイートインコーナーを連続させることで「内部」と「外部」をつなげる。



4-3 小堀遠州の綺麗さびのデザイン提案

小堀遠州にゆかりのある「綺麗さび」、「吹き寄せ」、「間道」をデザインコンセプトとして用いて設計を行う。無駄のないシンプルな空間によって綺麗さびを演出し、カウンターの側面には間道のモチーフをあしらう。また、「吹き寄せ」を「内部」と「外部」に連続して配置して流れをつくる。



5. 参考文献

河田智成（2011）「閑谷学校における「学びの場」の建築的構造化について」、p.71,名古屋造形大学（2006年）「小堀遠州 綺麗さびの極み」、小堀宗実,熊倉功夫,磯崎新,龍居竹之介ほかp.83（株式会社新潮社）